

点描ぐんま経済

日銀支店長

見聞録

■82■

9月の4連休。引ッ

越し作業が一段落した私は、手伝いに来てくれていた妻と、見頃と聞いた孀恋村のキャベツ畑を見に行った。

一面のキャベツ畑とその匂いは庄巻で、周囲の山々や田代湖の景観、きれいな空気が、そよ風とともに私を包み込んだ。キャベツの収穫体験も可能とのこと、事前に予約しなかったことを後悔。さらに現地で買ったキャベツは、妻が東京の自宅で食し、非常にみずみずしかったとのこと。まさに五感で楽しめる体験だ。

その孀恋村が、地場産産を体験する観光プ

孀恋村のキャベツ

…とか書いた看板があるな」と思いつつ、それ以上考えず、妻も何も思わなかったようだ。

ラン作りに注力している」と知って、わが意を得たり、とうれしくなった。キャベツ畑の体験は、村内のさまざま

な日常が、村外の非日常

村おこしに愛あり

常として、人々をひきつけ得ることを感じるに十分だった。最近注目のマイクロツーリズムにも格好の題材。成功をお祈りしています。

ところで私は、孀恋村で「愛妻の丘」に駐車した。通りかかっていたからだが「変わった名前だな」「愛妻家

今思えば、これは幸運だった。今回調べて孀恋村が、その村名もあって愛妻家の聖地と

され、愛妻の丘は「キャベチュー」、すなわち「キャベツ畑の中心

「妻に愛を叫ぶ専用叫び台」で叫ぶ方もいなかった（キャベチュー以外で叫ぶ方はどのくらいいるのだろうか）。こんなことを書いてみると、「お前が来るな」との声が聞こえてきそうですが。

1889（明治22）年発足の孀恋村の村名の由来は、日本武尊

が、海の神の怒りを鎮めるため投身した愛妻、弟橘姫を追慕し、鳥居峠で「ああ、わが妻よ、恋しい」と嘆いたという故事だ。命名

2010年分。思いがけない夫の愛の言葉と、それに涙する妻の姿。単なる微笑まじさを超えた感動がそこにはあった。

群馬県の皆さま、以後、どうぞよろしくお願いたします。

1972年生まれ。岡山県出身。東京大経済学部卒、米ミシガン大で経済学博士号取得。95年に日本銀行入行後、大阪支店営業課長や金融研究所経済ファイナンス



渡辺真吾（わたなべ・しんご） 1972年生

研究課長などを経て、2020年9月から現職。